

程順則の論理と現代社会 —「身体感覚としての道徳」をめぐる—

増田 康弘

はじめに

筆者はこれまでに沖縄県の南城市や那覇市においてフィールドワークを行い、「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる」という資料・調査報告を3編まとめている¹⁾。それらを執筆した理由は、琉球王国という東アジアの小国が、時代の流れに翻弄されながらも、たくましく生き残ろうとしてきた姿を知ることは、基地問題をはじめ、さまざまな課題を抱える現代の沖縄に、そして日本に何らかの示唆を与えるのではないかと考えたからである。そこで、まずはフィールドワークをとおして悠久の歴史に触れ、琉球王国の姿を人物像の検討から捉え、現代社会とのつながりを見出そうと試みたのである。

その試みに続き本稿では、1600年代後半から1700年代前半の琉球において、政治家、学者、教育者、詩人として活躍した「程順則」に焦点を当て、彼の人物像を掘り下げ現代社会との関係について考えてみたい。本稿の目的は、彼が生きた時代を知り、彼の功績を理解し、彼の思想や行動を内側から捉え、そこから得た知見をもとに現代社会を見つめることである。以下、彼の生きた時代、彼の生涯、彼の残した功績、彼のひとりとなり、彼の論理を順に確認し、最後に彼の生き方をとおして現代社会について考察する。

1. 時代

琉球と沖縄の歴史は、大きく「古琉球」「近世」「近代」「現代」の4つに区分される。1609年の薩摩侵攻を境に、それ以前を古琉球とし、それ以後1609年から1879年の琉球処分までを近世、1879年から1945年の沖縄戦までを近代、戦後を現代と呼んでいる。そのうち、程順則が生きた時代は近世である。

近世は薩摩侵攻から始まる。この時代は、薩摩によって日本の制度が持ち込まれ琉球社会学部論叢 第29巻第1号

の体制が大きく変わる、いわゆる「世替わりの時代」に入っていく時期である。琉球は独立した国家ではあったものの薩摩の支配を受けながら、江戸幕府の下におかれることとなった。そうした混乱の時代に登場するのが羽地朝秀²⁾である。彼は薩摩侵攻後の疲弊していた琉球の立て直しを図った人物であり、1666年には摂政³⁾の位につき、王府内で強い権限を握り固陋の旧習を打破していったのである。その後、1700年代に入り、羽地朝秀の改革を継承し、近世琉球をつくった人物が蔡温⁴⁾である。蔡温は三司官⁵⁾の地位につき、政治はもちろん、農業、林業、科学、思想、学問など、多くの分野において才能を発揮し、琉球が生んだ最大の政治家として語られている。そして、この蔡温とほぼ同時代に活躍したのが程順則である。程順則は薩摩侵攻から約100年が経ち、琉球の社会や文化が確立していく時期に登場し、それに寄与した人物であるといつてよい。程順則は琉球の官職制度をまとめたり、王府の学問教育に関与したり、さまざまな分野で有能な官僚として活躍したのであった。つまり、当時の社会がそのような必要性を要請していく中で登場した人物であり、まさに「時代に生きた」といってよからう。

また、この時期は対外関係、たとえば清（中国）や薩摩との関係も落ち着いており、政治、経済、産業、外交が好調で、琉球文化が力強く立ち上がった時期でもあった。程順則の出身地である久米村⁶⁾も、王府による強化振興政策のもと、衰退を乗り越え次第に活気づいていった。近世の久米村は、王府の進貢や学問に携わる職能集団として存在し、それらをとおして、王国の文化や思想、あるいは信仰に大きな役割を果たしたのである。

以上のように、程順則が生きた時代は、琉球を含めた東アジア全体が最も安定し繁栄した時期であったといえる。

2. 生涯⁷⁾

程順則は唐名⁸⁾であり、名護親方寵文⁹⁾とも呼ばれる。彼は学問に秀でた父である泰祚と母である真饒古樽の間に長男として1663年10月、那覇の久米村で生まれた。父の泰祚は、進貢使の通事役¹⁰⁾として清（中国）に渡り、程順則が13歳のときに蘇州で病死している。そのため程順則は若くして父の跡を継ぎ、真和志間切古波蔵の地頭となり地域のために尽力する一方、久米村の最高の学者と称された鄭弘良¹¹⁾から儒学を学んだ。

程順則は詩人としても名高く、多くの詩を残しており、日本に渡った際には摂政や藩主が彼を招いて作詩を求めたとされている¹²⁾。江戸では新井白石と意見交換を行い、白石はそこで得た知識から琉球の世系、官職、風俗、物産などの情報を含む地理書である『南島志』を著したという。また、江戸からの帰国の際、程順則はその高い文学的評価のために、近衛家熙¹³⁾との会見の機会も与えられている。

さて、程順則は生涯に五度ほど清（中国）に渡っている。一度目は1683年であり、8

月20日に通事に任ぜられ、福州での勉学を志し冊封謝恩使に随い渡清。12月5日、福州に着き著名な学者であった陳元輔¹⁴⁾、竺天植¹⁵⁾の門に入り5年間学んだ。二度目は1689年であり、接貢存留通事に任ぜられ福州琉球館に勤務する。2年後の1691年、存留通事の任期を終え帰国。その際、自費25金(20金ともいわれる)を投じて中国歴代の正史である『十七史¹⁶⁾』を購入し持ち帰り、孔子廟に献本した。三度目は1696年であり、北京大通事として、鄭弘良大嶺親雲上に随い渡清。福州と北京を往復した際に訪ねた名所旧跡を題材に漢詩をつくり『雪堂燕遊草¹⁷⁾』を刊行し、1698年6月7日に帰国した。四度目は1706年であり、進貢正議大夫¹⁸⁾として、耳目官¹⁹⁾馬元勳宮平親雲上良康とともに福州に赴く。福州での宴の後、濟寧州へ向かい、次いで北京に至る。1708年に福州に戻り帰国。このとき資金60金を投じて『六論衍義』一部、『指南広義』一部を版行した。そして、最後に渡ったのが1720年であり、冊封使の帰国の際に同行した。福州滞在中、清(中国)を中心に周辺朝貢国の詩人の作品が収められた『皇清詩選²⁰⁾』数十部を自費で購入し、帰国後、每部三十巻を王府書院に、一部を聖廟に、一部を評定所に献上し、残りを師友に配ったとされる。このとき程順則59歳であった。

その後、1728年66歳のときに名護間切の総地頭に任命され、「名護親方」となった。有徳の人物であるという評判も高く、その清廉な人柄は人々から敬愛され、いつしか「名護聖人」と呼ばれるようになった。そして、1734年に72歳でこの世を去ったのである。

以下、程順則の年譜を記す²¹⁾。

【程順則年譜】

- 1663年 程順則生まれる
- 1674年 若秀才となる(年俸・米五斗)
久米村に孔子をまつる「孔子廟」を竣工させる
- 1676年 秀才に挙げられ、元服する(年俸・米一石五斗)
- 1677年 父の家統を継いで、真和志間切古波蔵地頭になる
- 1683年 通事となる。留学生として第一回目の中国訪問
- 1687年 中国から帰国。講解師匠(国が認める先生)となる
- 1689年 通事として第二回目の中国訪問
- 1691年 帰国。『十七史』を購入し孔子廟に献上する
- 1694年 妻が29歳で逝去
- 1695年 母が58歳で逝去。都通事となる
- 1696年 進貢北京大通事となる。第三回目の中国訪問
- 1702年 3月に三男、6月に弟・順性、7月に長男、9月に次男が相次いで逝去
- 1706年 進貢正議大夫となる。第四回目の中国訪問

- 1708年 『六諭衍義』を中国で製版・印刷し持ち帰る
- 1714年 江戸慶賀使として与那城王子、金武王子に随行し江戸に赴く
途中、島津吉貴公に朝見し、『六諭衍義』を献上
江戸に上り、新井白石や荻生徂徠らと会見
- 1718年 琉球最初の学校「明倫堂」を久米村に創建
- 1719年 三司官座敷に列せられる
- 1720年 前年の冊封に対する謝恩使として中国に行く（第五回目の中国訪問）
- 1728年 名護間切の総地頭となり、以後は名護親方と呼ばれるようになる
- 1734年 逝去
(出所 安田和男(2009)『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ポーター新書001,
ポーターインク, 18~21ページより一部抜粋)

3. 功績²²⁾

程順則が残した功績は数多くあるが、ここでは『六諭衍義』の普及と『指南広義』の執筆について触れる。

(1) 六諭衍義の普及

1683年、21歳になった程順則は清（中国）の福州に留学し、儒学の大家である陳元輔の弟子となり、昼夜を問わず勉学に励んだ。また、彼は竺天植という儒学者のもとでも学びを深め、このときに范鋌²³⁾が記したとされる『六諭衍義』と出会ったという。「六諭」とは中国皇帝が民衆を教化するために諭した6つの教えであり、「衍義」は解説書という意味である²⁴⁾。その内容は、①孝順父母（父母に孝行しなさい）²⁵⁾、②尊敬長上（目上の人を尊敬しなさい）²⁶⁾、③和睦郷里（村里にうちとけなさい）²⁷⁾、④教訓子孫（子孫を教え導きなさい）²⁸⁾、⑤各安生理（各々の生業を全うしなさい）²⁹⁾、⑥母作非為（悪いことをしてはならない）³⁰⁾とされ、これに感動した程順則は、四度目の渡清の際に巨額の私費を投じて印刷し、琉球に持ち帰り国王に献上したとされる。『六諭衍義』は道德教本であるが、程順則はこれを道德教化のためだけではなく、中国語官話の正音を習得するのに理想的なテキストとし、中国語の学習にも用いたのであった。

また、常に庶民教育に心を配っていた程順則は、『六諭衍義』の教えを広めるために多くの琉歌を詠み、それを庶民が日常的に愛誦することで、厚い人情と道德をつくったとされる。琉歌とは琉球風の短歌であり、上句8・8、下句8・6の30音から成る短詩が主流とされ、程順則は「人の生き方」や「心の在り方」を伝える琉歌を創作したのであった。

1714年、程順則は徳川家継の將軍就任を祝う慶賀使として江戸に向かう途中、『六諭

衍義』を薩摩藩主の島津吉貴に献上した。そして、その5年後の1719年には、吉貴から次代将軍の徳川吉宗に献上されたという。吉宗はこれを非常に高く評価し、儒学者の荻生徂徠に訓点をほどこすことを命じ、また幕府の儒官であった室鳩巢に和訳を命じた。その結果、『六論衍義大意』が完成し、寺子屋教育や明治以降の日本全国の初等教育において広く利用されたのであった。

ところで、前述のとおり程順則は『六論衍義』を広く普及させたわけであるが、彼が教育に果たした大きな功績の1つに、琉球初の公的教育機関である「明倫堂」の設立が挙げられる。明倫堂は1718年、程順則の建議によって久米村の孔子廟内につくられた学校であり、久米村子弟の教育を担い、語学や航海技術のほかに、儒教の教えに則った人の在り方が指導された。なお、明倫堂の初代校長は程順則が務めたという。

(2) 指南広義の執筆

『指南広義』は1708年に清（中国）の福州琉球館（柔遠駅）で版行された、福州と那覇とを航行するための手引書である。「指南」は磁針を使っての航海術であり、「広義」は大方の人々にその航海術を広くわかってもらうということである³¹⁾。程順則は本書の執筆にあたって、2つの情報源を使用した³²⁾。1つは、久米村で代々伝えられてきた水先案内人の心得である。もう1つは、中国船の水先案内人から学んだ航海術に研究改良を加えた自分自身の経験である。本書の内容には航海の針路のほかに、天妃（媽祖）の加護を受けて災難から免れた事例について記した「天妃靈応記」、航行する距離（里数）について記した「更数の法」、風の時期と方向について記した「風信考」、出航の吉日について記した「行船通用吉日」などの航海に必要な種々の情報が盛り込まれていた。たとえば、「風信考」には次のようなくだりがある³³⁾。

清明以後は大気が南から北に移動する。そして南風がたえず吹くようになる。霜降になると大気は北から南へ移り、北風が吹く。

もし、決まりきった風向きに異変が生ずると、これは暴風の前ぶれであって、舟を出してはいけない。暴風はいちばん激しいのを颶風といい、そのつぎに強いのは台風である。颶風は瞬間的に強いもので、ただちに止む場合があるが、台風はそれよりやや烈しさが劣るが、持続的で一日中暴れまわるときもあれば、数日間も続いてようやく収まる場合もある。

颶風とは、現在でいう温帯低気圧のことである。つまり、ここでは温帯低気圧と台風とを区別した記述となっているのである。300年以上前の程順則の知識が、現代の気象学に通じるものであったことを表す記述であるといえる。

さて、『六論衍義』と『指南広義』の版行について、那覇市企画部市史編集室編纂の『那覇市史 資料篇 第1巻5』には次のように記されている。「同 四十五年丙戌四月、使を奉じて進貢正議大夫となる。十一月耳目官馬元勳宮平親雲上良康と共に那覇開

船して閩に赴く。次年四月、布政司微紫堂に於て宴を賜う。七月福建啓行し九月山東濟寧州に到る。十月濟寧州起身して京に到り上表して貢物を納む。(中略)十二月三日勅書を領し五日出京し戊子年三月八日福州に至る。五月閩安鎮を出て六月二日歸國し九日勅を捧げて復命す。順則閩に在りて六十金を捐して六諭衍義一部、指南廣義一部を板行す³⁴⁾。なお、ここに記された「同 四十五年」は、「康熙四十五年(1706年)」を指す。

4. 人物

前述のとおり、程順則は政治家、学者、教育者、詩人として活躍し、また有徳の人物であるという評判も高く、のちに「名護聖人」と呼ばれるまでになった。ここでは、程順則のひとつとなりについて、いくつかの文献から例を挙げ確認してみよう。

(1) 名護親方善行伝³⁵⁾ より

[例 1³⁶⁾]

程氏名護親方、諱は順則、字は寵文。唐榮の朝京都通事・程泰祚の子にて、母は鐘氏真饒古樽という。程公、康熙二年(一六六三)癸卯十月二十八日生れり。幼児のころより他の小兒等と異なり、別して律儀にこれあり。天性仁孝にして、氣立て柔和に顔色愉快しく相見え、よく父母の心志に承け順い、子たるの職分を尽くし、もっとも、学業を好みて昼夜誦読止む時なく、……(中略)……不正の書、非礼の色、見ることを嫌い、もっぱら人倫を重んじ敦く孝弟を行い、宗族の取り合せ親厚に、郷党の人と和順に相交わり候。

〈訳〉

程順則は1663年10月28日、父である泰祚と母である真饒古樽の間に長男として生まれた。幼いころから、ほかの子どもとは異なり天性は仁孝、氣だては柔和で、表情はにこやかで、父母の願いを汲んで仕え、子の役目を果たし、学業を好んで昼夜を問わず勉強に励み、……(中略)……正しくない書物や礼儀にそむく様子を見ることを嫌い、もっぱら人と人(君臣、親子、夫婦、長幼、朋友)との道徳的な秩序を重んじ孝行し、一族と親しくすること厚く、ふるさとの人たちと穏やかに暮らした。

[例 2³⁷⁾]

ある時、朋輩等三五人と林下に遊び候ところ、ひとりの友その辺に見え候鶏を盗み来たり。これにて鶏飯を調え喰わんと申し候えば、いずれも同意いたし、程公は否と思ひ候えども、差し留めがたき体見及び、この鶏、我が家において料理候ては如何と申し候えば、皆同悦にてその家に参り候。程公、取り計らいを以って鶏飯を調え、相共にこれを給い候。後日、ひとりの友、林下においてまたその鶏を見つけ、相考え候に、鶏を盗

むは不義なりと。程公、自分買入れ候て相弁じ、かの鶏、林下に放し候わんと。その段、朋輩等へ相達し候えば、程公誠に書を読みたる君子、我等小人、甚だ恥ずかしき儀と、いずれも程公へ罪を謝り候。

〈訳〉

ある日、程順則が友人とともに林のほとりに遊びに出かけたところ、友人の一人が鶏を盗んできた。「これを調理して食べよう」という提案に対し、皆が同意した。程順則は「よくない」と思いながらも、止めることができなかった。そこで程順則は「これを我が家で調理しよう」と提案し同意を得、家に帰って調理をし皆で食べた。ところが後日、友人の一人が林のほとりで自分たちが食べたはずの鶏を見つけ驚き、自分たちが食べた鶏は程順則が自ら買って調理をしたもので、この鶏は「鶏を盗むことは人の道に外れること」と考えた程順則が逃がしたものであることを知った。そのことを他の友人たちに伝えたところ皆、自分の鶏を調理してまで間違いを正そうとした程順則に対して恥ずかしくなり、彼のもとに謝りに来たのであった。

[例 3³⁸⁾]

夜中道歌をうたい徘徊いたし候者、程公の門前に至り候えば歌を止め、呑酒酔狂にて通り候者も、その門前においては酒醒め候よし。これ程公、徳化のいたすところと取沙汰申し伝え候。

〈訳〉

夜中に歌をうたいながら徘徊する者がいたが、程順則の家の前に来るとうたうことを止め、酒に酔った者も程順則の家の前では襟を正した。これは程順則の徳によるものと伝えられている。

(2) 蔡温からの手紙より

[例 4³⁹⁾]

あなたはもともと口数が少なく、友人とは誠心誠意で交際するという人柄である。相手の言動に、おろか下品なことがあっても、すぐそれを忘れ、相手にちょっとでも美点や悟るところがあれば、それに報いるように努める。ねがわくは、私の言うことをよく推察してくだされば、これに勝る喜びはない。

(3) 程順則が詠んだ琉歌より

[例 5⁴⁰⁾]

意見寄言や 身の上のたから 耳の根ゆ開きて 肝に留みり

(イチンユシグトウヤ ミヌウイヌタカラ ミミヌニユアキテイ チムニトウミリ)

〈歌のころ⁴¹⁾〉

他人から受ける意見や教訓は、我が身にとってはこの上ない宝である。だから、しっかりと聞いて忘れることがないように、心に留めておきなさい。

[例 6⁴²⁾]

憎さある人も 憎さどもするな 肝の持ちなしや 広く開きり

(ニクサアルヒトゥン ニクサドゥンスルナ チムヌムチナシヤ ヒルクアキリ)

〈歌のこころ⁴³⁾〉

たとえ憎い人であっても憎んではならない。心は常に広く持つように心がけなさい。

[例 7⁴⁴⁾]

誹らわも構な 誉らわん構な 我肝思み詰まり 朝も夕さも

(スシラワンカムナ フミラワンカムナ ワチムウミチミリ アサンユサン)

〈歌のこころ⁴⁵⁾〉

他人に誹られようとも、誉められようとも気にとめることはない。とにかく人間にとって大切なことは、朝に夕に自分の心を磨くことである。

[例 8⁴⁶⁾]

常に思み詰まり 人の習わしや 童しの肝ど 地福さらみ

(チニウミチミリ フィトゥヌナラワシヤ ワラビシヌチムドゥ ジフクサラミ)

〈歌のこころ⁴⁷⁾〉

常に心得ておきなさい、人格の形成というものを。人の基本的な生活習慣や人間性というものは、幼児期の心づくりが基盤になっているのです。

[例 9⁴⁸⁾]

惜しで惜しまりみ 玉の緒の命 若さ頼がきて すそうに持ちゆな

(ウシディウシマリミ タマヌヲウヌイヌチ ワカサタルガキティ スソニムチュナ)

〈歌のこころ⁴⁹⁾〉

惜しんでも惜しまれないのは、たった一つしかない命である。だから、若さを頼みにして命を粗末にしてはならない。

[例10⁵⁰⁾]

佛神でんし 肝の上の捌ち 誠ゆい外に 神やねさみ

(フトウキカミデンシ チムヌウイヌサバチ マクトウユイフカニ カミヤネサミ)

〈歌のこころ⁵¹⁾〉

佛や神であってさえも心の奥深くまで十分に捌き通せるものではない。だから、その

人自身が物事に誠心誠意尽くす誠実心以外に神はいない。

以上の例から、程順則の徳の高さや愛の大きさをうかがい知ることができよう。ここに挙げたほかにも、程順則の徳を讃えた文献や彼の人生観・教育観などが見て取れる琉歌は数多く存在する。また、沖縄各地に伝わる昔話（伝説）の中でも程順則は、「偉い人」「徳のある人」「頭がよい人」「神様」として語られている。

5. 論理

程順則は道德教育に多大な功績を残した人物である。では、なぜ彼はそのような功績を残すことができたのだろうか。その点を中心に彼の論理について考えてみたい。

程順則は久米村の名家に生まれ、幼いころから儒学に親しんでいた。そして、清（中国）に渡り著名な儒学者のもとで、さらに学びを深めていったのである。程順則の思想形成の土台となったであろう儒学は、孔子に始まる学問であり、個人の道德的修養と徳治主義的政治を重んじるものである。つまり、個人は正しい行いをするために学問を修め、精神を磨き、人格を高める努力をし、国家は道德によって民衆を治めるといった考え方である。程順則の論理には、その根底に「道德」があったと考えるのが自然である。

程順則は1683年、21歳のときに『六諭衍義』と出会ったとされる。それから25年後の1708年に巨額の私費を投じて印刷し、清（中国）から持ち帰るのであった。この事実から、程順則が『六諭衍義』に強く惹かれていたことは想像に難くない。そして、この道德教本である『六諭衍義』を国王や薩摩藩主に献上する一方で、庶民に理解させ、広めるために数多くの琉歌を詠み、人間の「心の在り方」や「あるべき姿」を示したのであった。やはり、程順則の論理には一貫して「道德」という概念が存在しているといつてよからう。

このような「道德」をもとにした考え方は、学問以前に程順則が育った家庭環境が影響しているとも考えられる。程順則の父である泰祚は立派な官歴を有する人物であったし、母の真饒古樽も非常な賢母であったという⁵²⁾。最も身近な存在である両親が、学識が高く、清廉潔白であれば、その家庭で育った程順則が清らかな心を持った人間となることは至極当然である。また、私生活上の苦しみも影響していたと思われる。程順則には4人の息子がいたが、次々に早世しているのである。断腸の思いであったに違いない。そういったことから、未来の担い手である子どもたちの教育に心を砕いていたのかも知れない。

さらに、清（中国）と琉球との関係、すなわち社会環境も少なからず影響していたのではないかと。当時の清（中国）と琉球は冊封関係にあった。「冊」とは中国皇帝の言葉を意味し、「封」とは諸国に任命すること、土地を与えることをいう。したがって、「冊

封」とは朝貢国王の代替わりに、中国皇帝が新国王を任命することを指すのである。明や清の2つの帝国（中国）にとって外交とは、皇帝の徳を広め、徳をもって諸外国を治めるものであり、また臣従国は礼をもって接するという儀礼そのものであった⁵³⁾。そのような清（中国）と琉球との関係や「守禮之邦」として礼節を重んじた当時の琉球社会の在り方も、程順則の論理に組み込まれていたことが考えられる。

有徳の人物として語られる程順則であるが、彼が学んだ儒学、彼が置かれていた環境、そして彼が生きた時代などが調和することによって、「道徳」を基盤とした論理が作り上げられたのではなかろうか。

6. まとめと考察

これまで程順則の人物像を確認してきたが、ここで整理してみよう。彼が生きた時代は、琉球を含めた東アジア全体が最も安定し繁栄した時期であり、琉球文化が花開いたのもこの頃であった。そのような時代に、程順則は多方面で活躍したのである。とりわけ教育者としての才能は素晴らしいものであった。また彼の生涯についてであるが、ここで特筆すべきは、五度にわたり清（中国）へ渡航し、見聞を広めたことであろう。程順則は琉球のあるべき姿を清（中国）と重ね合わせ、その実現に尽力したのである。そして、程順則の大きな功績に『六論衍義』の普及と『指南広義』の執筆が挙げられる。前者は道徳教本であり、琉球人だけではなく日本人の教育にも大きな影響を与えた。後者は清（中国）の福州と那覇とを航行するための手引書であり、当時の航海技術の発展に寄与したのであった。程順則はその人柄から死後、「名護聖人」と呼ばれるまでになったわけであるが、①彼が幼少の頃から勉学に励み、清（中国）に渡り儒学の大家のもとで学びを深めたこと（学問的思想）、②学識が高く、清廉潔白な両親のもとで育ったことや4人の息子を早くして亡くしたこと（家庭環境）、③当時の清（中国）と琉球との関係や「守禮之邦」として礼節を重んじた琉球社会に身を置いていたこと（社会環境）などが調和された結果、道徳的権威と感化の象徴になったと考えられる。そういったことから、彼の論理には、一貫して「道徳」が基底にあったといえよう。以下、程順則の生き方とおして現代社会を見つめることとする。

現代社会は多くの課題を抱えている。経済、社会、教育、環境、心の問題など枚挙にいとまがない。どの課題を取り上げてみても、そこに「道徳」や「倫理」といったものが存在するのかと疑いたくもなる状況である。たしかに、学校教育において道徳教育がなされてはいるが、多くの指摘があるように、解決し難い課題を抱えている⁵⁴⁾。その課題の内容や克服の仕方について本稿では触れないが、程順則が示した「身体感覚としての道徳⁵⁵⁾」の必要性を提示しておく。それは『六論衍義』を用いて道徳を伝えるとか、人の生き方を学ぶ歌をつくって国民に愛誦させるといったことではない。時代も社会も

大きく異なるのだから当然である。「身体感覚としての道徳⁵⁵⁾」については後に触れるとして、ここで現代の教育、とりわけ道徳教育の在り方について筆者なりの若干の見解を示しておこう。

現代の教育について、八木誠一は次のように指摘している。「現代の教育は科学的・社会的知識を偏重しているとはよくいわれることである。感情教育、徳育が必要だという声も聞こえる。しかし、感情と道徳性の根本に知があることはあまり気づかれていない。たとえば人には価値観の違いがあり、だから同じ状況でも行動や感情的反応に違いがでてくるのだが、価値観の底にはさらに、自分自身をどのように了解するかという知の問題がある。この知は科学的知というより自覚の知である。自覚とは、自分で自分自身のところに直接にふれること、言い換えれば人間性に直接に触れることにほかならない。他人の痛みは無感覚な人間が増えているというが、もしわが国の教育に憂いを抱くなら、いわゆる知識偏重の教育が人間のところに触れることをおろそかにしている現状に気づくべきである⁵⁶⁾」。では、「自覚の知」を促すために、あるいは「人間のところ」に触れるためには、何が必要なのであろうか。そのためにはまず、たとえば人間性といったものを引き出す教育が不備であることを理解しなければならない。そして、その教育の不備を補うために必要なものが教養である。教養とは人間の可能性の円満な自覚のことである⁵⁷⁾。人間の本質への感覚を育て、人間性の円満な展開を実現していくためには、前述の八木の指摘にもあるように、客観的知識の習得に重点が置かれる教育だけに頼ることに限界があろう。人間性への肯定と尊重、共感、他者への思いやりなど、それを「ヒューマニズム」といってもよいが、それらは人間の教養をとおして身につくものである。教養などという言葉を使うと、昨今の流れに逆行するようではあるが、いずれにしても自分だけの空間に引きこもることなく、しっかりと他者と向きあい対話するといった、臨場感あふれる学習（学修）が必要である。

さて、再び程順則に戻るが、彼は豊かな人間性を表現する教養、たとえば政治学や芸術学⁵⁸⁾に触れ、自らの人格を高め、身をもって周囲に示した。知性や感情や意思などを含んだ身体全体で修養し、実践し、それをもとに人格的感化を与えた。この道徳的な態度と感覚を「身体感覚としての道徳」と呼ぶこととする。現代社会においては、人間をものや道具として扱う感覚が増大している。それどころか、道具に人間が使われるといった本末転倒な事態が生じているような気さえする。これらは生きた身体感覚の喪失といってよい。たとえば、手のひらサイズのコンピュータの画面をのぞき込み、すべてをそこで解決しようとしてはいないか。自ら考えることを放棄してはいないか。人間は考える葦である。考えるからこそ人間なのである。今一度、考えることや想像することの重要性を確認し、身体感覚を取り戻すべきである。「正直」者が馬鹿をみる、「正論」を述べると嘲笑される、「理想」を語ると呆れられる、「真面目」はグサイと切り捨てられるといった場面が散見される現代社会にこそ、程順則が示した「身体感覚としての道

徳」が必要であると考えることができる。

300年以上前の程順則が活躍した時代の琉球と現代の日本とでは、大きな隔たりがあることは間違いないが、人の生き方や心の在り方には共通するものがある。程順則の人物像を掘り下げ、現代に生きる我々が見失いがちな「(身体感覚としての) 道德」という1つの内面的原理を確認したところでまとめとしたい。

おわりに

筆者は社会(環境)と人(生活の主体者)、あるいは両者の相互作用(交互作用)について考える立場にある。そのため歴史を紐解くことを研究の目的に据えてはいない。そもそも歴史を紐解くことなど筆者には不可能である。では、なぜ歴史に触れるのか。それは歴史や歴史上の人物について学ぶことによって、現代社会のあるべき姿が見えてくるのではないかと考えているからである。今を捉え、未来を見据えるためには、古きをたずねる必要があるのではないか。そのような思いを抱きながら琉球の歴史や人物を見つめている。時に歴史のロマンを感じつつ。

今後も世の中の常識や当たり前を疑い、問い直す姿勢を基本に、独自の視点で社会と人を描写し考え続けていきたい。

注

- 1) 流通経済大学社会学部論叢第27巻第2号, 第28巻第1号, 第2号所収。
- 2) 唐名は向象賢。王命によって琉球王国の正史である『中山世鑑』を編纂した。また、彼が実施した政策をまとめたものに『羽地仕置』がある。その内容は、①質素儉約, ②古い伝統行事の見直し, ③役人の不正の取り締まり, ④風俗の乱れの規制, ⑤士族への諸芸の奨励, ⑥身分の明確化など多岐にわたる。琉球の五偉人の一人。琉球の五偉人とは、ほかに儀間真常, 程順則, 蔡温, 宜湾朝保をいう。
- 3) 「せっせい」(あるいは「シッシイ」)と読む。王権の正統たる王位に次ぐ地位であり、国王を補佐する官職。それまでは王族しか就任できなかった地位である。
- 4) 具志頭親方文若の名をもつ。琉球王国史上、最も偉大な政治家とされる。外交官, 哲学者, 土木・農業技術者としても活躍した。また, 国家観や政治の心得, 道德書, 農林業の技術書, 自叙伝など, 数多くの著作を残したことでも有名。琉球の五偉人に数えられる。琉球の五偉人とは、ほかに儀間真常, 羽地朝秀, 程順則, 宜湾朝保をいう。
- 5) 琉球王国の宰相職。首里王府の実質的な行政の最高責任者とされる。
- 6) 明代に皇帝の命を受けた閩(現在の福建省)の職能人が琉球に渡り, 那覇港に近い浮島(現在の那覇市久米)につくった集落。彼らは閩人三十六姓(久米三十六姓)と呼ばれ, 琉球と中国, 東南アジアとの貿易において外交文書の作成や通訳, 対外交渉, 航海案内などを担い, 琉球の大交易時代の原動力となった。
- 7) 増田康弘(2017)「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅱ)―那覇市のフィー

- ルドワークから—』『流通経済大学社会学部論叢第28巻第1号』流通経済大学, 116ページに加筆・修正した。
- 8) 「からなー」と呼ばれる中国風の名称。公文書や中国との外交上で用いられた。「程」は姓(氏), 順則は名(諱)。
 - 9) 近世の琉球士族は, 子どものころは童名(わらびなー)で呼ばれ, 成人すると家名(やーぬなー) + 称号 + 名のりが名前となり, これを大和名(やまとな)という。「名護(なご)」は家名(治める領地を冠するのが一般的), 「親方(うえーかた)」は称号(士族が賜ることのできる最高の称号), 「寵文(ちょうぶん)」は名のりをさす。
 - 10) 「通事」は久米村の官位称号の1つで, 通訳官を指す。20歳代になると, 譜代の里之子家が若里之子(従八品), 通事家は筑登之座敷(従九品)に昇位して通事の位を得る。その後は官位相応の旅役を経て, それぞれ里之子親雲上(正七品), 通事家の出身は通事親雲上(従七品)となり, 黄冠を戴く。その後も旅役を務めるか, または旅役の功に相当する功績を積むことによって当座敷(従五品), 勢頭座敷(従六品)へと進む。さらに功を積んで累進して, 双方とも座敷(従四品)の位を得て都通事になる。唐榮の旅役は, 進貢・接貢・謝恩使・慶賀使などの通事となって渡唐するが, その役目によって名称も異なる。20歳代で総官, 王舅通事, 通事を務め, その後は旅役を重ねるごとに順次, 副通事(脇通事), 在船通事, 在船都通事, 在留通事, 朝京都通事(単に都通事, あるいは北京大通事, 大通事ともいう)などの役を経て昇進する(鄭氏会—久米村士族位階 (<http://teiuji.ti-da.net/c134103.html>) 2016年12月12日アクセス)。
 - 11) 訓詁師(漢文教師), 講解師(講談教師)。久米村の鄭氏12世で大嶺親方と呼ばれた。
 - 12) 井上秀雄監修, JCC出版部著(2011)『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版, 115ページ。
 - 13) 江戸中期の公家。近衛家21代当主。関白, 摂政, 太政大臣, 准三宮を歴任。1725年に落髪して予楽院と号した。学問を好み, 詩歌, 書, 茶の湯など諸芸に通じた。
 - 14) 中国清代の学者。程順則の父である程泰祚も彼に学んだとされる。
 - 15) 中国清代の学者。程順則は彼の机上に『六諭衍義』を発見したとされる。
 - 16) 中国歴代の正史17書の総称。17書とは, 「史記」「漢書」「後漢書」「三国志」「晋書」「宋書」「南齊書」「梁書」「陳書」「魏書」「北齊書」「周書」「隋書」「南史」「北史」「新唐書」「新五代史」を指す。
 - 17) 程順則による漢詩集。「雪堂」は号, 「燕」は燕京(北京)を指す。
 - 18) 中国への進貢の際, 進貢副使になる役職。「正議大夫」とは, 久米村人に与えられた官位。
 - 19) 正三位政務官。進貢使節団の正使。使節団は福州に着くと, ①次の夏に琉球へ帰国する「摘回」, ②しばらく福州に駐在する「存留」, ③中国皇帝に謁見するために北京へ向かう「進京」の3つに分かれる。このうち「進京」は, 正使耳目官, 副使正議大夫, 朝京都通事などの役人やその随行人などで構成された。
 - 20) 1705年に中国で出版された詩集。琉球の詩人の作品も約70首が収められている。
 - 21) 安田和男(2009)『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 18~21ページ。
 - 22) 増田康弘(2017)「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅱ)—那覇市のフィールドワークから—』『流通経済大学社会学部論叢第28巻第1号』流通経済大学, 117~118ページに加筆・修正した。

- 23) 明の洪武帝が民衆教化のために作成した6つの教訓（六諭）を、わかりやすく解説（衍義）した人物。
- 24) 井上秀雄監修, JCC出版部著 (2011)『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版, 112ページ。
- 25) 父母に孝順なれ：家族制度の根本は、家を継続発展させることである。人生れて父母に出でざるなく、父母の恩を受ざるものはない。懐胎、哺育、教養至らざるなく、心身共に子孫のために艱難をいとわず、その恩たるや海山よりも深くかつ高い。孝は百行の本、齊家の本たる所以である。孝とは、物質的満足より精神的慰安を与える事を第一義とし、死後の厚祭より生前の薄安を以って要道とせねばならぬ。最愛の妻子たりとも、失ってもまた得べし。一度失ってまた得べからざるものは、父母である。人の子たるもの、心すべきである。孝子出でて衰えた家は未だこれあらず。家興れば村栄え、国必ず隆となる（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 101ページ）。
- 26) 長上を尊敬せよ：世界は広く、人多しと雖も、ただ礼儀の如何によって品位の上下、文野の高低が定まる。従の主に対する礼、子の親に対する礼、その他夫婦兄弟姉妹上下の秩序は、礼儀によって定まるものである。古より高位なる人、老年なる人、賢徳ある人、これを三つの達尊と称し、天下おしなべて敬うべき長上としている。礼によってのみ秩序は維持され、秩序ある社会にして始めて安寧幸福が得られる。しこうして長上を尊敬することは、秩序維持の要道であらねばならぬ（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 101ページ）。
- 27) 郷里は和睦せよ：凡そ郷村に居を同じくする者は、祖先以来常に相通い郷民皆血族兄弟である。しかるに、今の世の人、一時の怒り、僅かの利害で相争い、遂に公事訴訟にも及ぶ。誠になげかわしき限りである。これ常に己を是とし、人を非とし、己が利のみ知りて、人の害を顧みないことからおこつて来る。我が身を思う人は人心ではあるが、また情け知らぬは木石に同じく、我も人もよき様に心得えば、争いは起こらざるものぞかし。大学にも、「家を出でずして教を国になす」とあるが如く、先ず一家を斉め、しこうして隣保郷村互いに水火、盗賊、天災、不慮の難あらば、互いに合力し、行跡悪しき人を懇切に諫め、賢徳ある人を尊び、学問ある人に親しみ、才芸ある人を讃し、無能なる人を教え導き、争いに及ぶ者を戒め、愁に沈む人を慰め、孤児、寡婦、老病、不具者をいたわり、困窮無力の人を助け、しからば一郷の人思い合い、一家の親しみの如くいかでか和睦せざらん。郷村自治の本義、誠にこの心にかあると（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 101～102ページ）。
- 28) 子弟を教訓せよ：凡そ家の存続発展の本は、また子孫の繁栄にある。繁栄は子孫の数より質に重きを置かねばならぬ。家の繁衰は、一に子孫の善き悪きによる。故に、大家小家皆子孫のよきを願ってやまぬ。しかるに、子孫生れながらにしてよきは稀にして、必ず教育によらねばならぬ。先ず家庭において孝敬、言語、起居、勤勉、朝夕の出入、飲食、衣服その他の躰をよくし、学校にては学問は勿論、生業に関する知識技術を授けることをなす。人は教育によってのみ人となることが出来る。教育衰えれば国衰え、教育盛んなれば国栄え、学問、芸術、殖産、興業、皆教育なくして望まれぬ。古より偉大なる真の政治家は教育を通じて人

を動かし、産を興すを以って治国安民の要道とした（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11，名護市教育委員会文化課市史編さん係，102ページ）。

- 29) 各々生理を安ぜよ：人々各々の自己の性能，天性，運命というものがある。これ，人の一生に定まった道理であるから，これを生理という。各自この生理に落ちて他を求めざるを「各々生理を安ずる」という。武士は武士，学者は学者，教育家は教育家，政治家は政治家，農工商は農工商，その他人皆世に出でてなすべき任務，職業使命があると共に，また各その心得がある。人生れて職業なき者はない。故にまた，生理は生業ということである。我に相当する職分を尽くせば，それに相当する衣食がある。諺にも，「天は食物なき人を生まず」と。また女にも生理がある。古より今に至るまで，国王の后さえ手づから養蚕，製糸，機織，裁縫をなされた。況や，それより以下の人々，いささかも怠るべからず。凡そ在家の婦女は華麗を退け，遊芸を楽しまず，常に，機織，縫業，早起，辛苦自らなすべく，これ女の生理である。要するに，貧富貴賤，各生理に基きて差ありと雖も，ただ我に当った職を勤め，日に好事を行い，今から行先を問うべからず。万町の田を持っても，日に食するは三度に過ぎず。百千衣服を持っても，着るは数枚に限り，千間の家に住んでも夜の眠は八尺にとどまると。常に我に事足る様，己を知って他を求むる心なければ，万町の田，百千の財衣，千間の家もまた自ら得。これをこれ生理を安ずるといふ（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11，名護市教育委員会文化課市史編さん係，102～103ページ）。
- 30) 非為を作す母れ：天地万物森羅万象きわまりなしと雖も，総て是非の二つに帰す。道理に従うを是とし，道理に背くを非為といい，その起りは一念の上から覚悟を誤り，覚えぬ大逆にもいたる。世には材智もあり，器量もある人多し。しかれども，或は邪智によって事をたくらみ，人を欺き，或は血気にはやって礼を乱り法を破る。その所行，多く非為の事にあらざるなく。人皆聖賢ではないから，過のない人はない。けれども，一念発起して自分の非を改むれば，今日からよき人になり得る事は，丁度道にふみ迷う人が一度足を転じて引き返せば本道に出るが如きものである。また，世には人倫をおろそかにして神仏に祈って生前の福を求むる者があるが，神仏と雖も善に幸し，悪に禍するものであるから，その心だに誠あらば，祈らずとも神は守り，その行不善にして祈るとも何の益かある。王法の罪のはのがるとも，神明の譴はのがるべからず。人間の私語は天の耳には雷の如く高く聞こえ，世上の密事は神の目には電光の如く明らかに見えるものであり，策によって立つ者は短く，徳によって立つ者は永しとかや。知余りて徳足らざる者は徳を積み，徳ありて凡なる者は知を磨き，知徳兼ね備わりてこそ有用の材とはなり得るものぞかし（名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11，名護市教育委員会文化課市史編さん係，103ページ）。
- 31) 眞栄田義見（1982）『名護親方程順則評傳』沖縄印刷団地出版部，74ページ。
- 32) グレゴリー・スミッツ著，渡辺美季訳（2011）『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史』ペリかん社，100ページ。
- 33) 大城立裕（1992）『琉球の英傑たち』プレジデント社，239ページ。
- 34) 那覇市企画部市史編集室（1976）『那覇市史 資料篇 第1巻5』那覇市役所，227ページ。
- 35) 1807年に屋富祖親方鄭章観が著した「総理唐栄司程公伝」を，1844年に喜納親雲上が日本

- 語に翻訳・編集したもの。程順則の徳行について広く人々に知ってもらう目的から、日本語で編まれたとされる。
- 36) 名護市教育委員会名護市史編さん室編 (2005) 『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 110ページ。
- 37) 名護市教育委員会名護市史編さん室編 (2005) 『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 110~111ページ。
- 38) 名護市教育委員会名護市史編さん室編 (2005) 『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11, 名護市教育委員会文化課市史編さん係, 111ページ。
- 39) 大城立裕 (1992) 『琉球の英傑たち』プレジデント社, 232ページ。
- 40) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 24ページ。
- 41) 同上
- 42) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 30ページ。
- 43) 同上
- 44) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 58ページ。
- 45) 同上
- 46) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 60ページ。
- 47) 同上
- 48) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 70ページ。
- 49) 同上
- 50) 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 86ページ。
- 51) 同上
- 52) たとえば, 名護市教育委員会名護市史編さん室編集の『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』(2005)に収められた国吉有慶による「程順則伝」, 梅山(当真嗣合)による「名護の聖人 程順則」, 真境名安興による「教育界の偉人 程順則」, 陳元輔による「程大母恭人伝」を参照のこと。
- 53) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会, 株式会社シネマ沖縄 (2013)「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖縄。
- 54) たとえば, 佐伯啓思は道徳について「確かにそれを『教える』ことはむづかしい。まして教科にはならないだろう。なぜなら, それは, 日常の具体的な場面で, その状況に応じた経験のなかで学び取るほかないからである。道徳(モラル)とは日常の習慣(モーレス)なのである。ということは, 日常的に, 教師が生徒と接して, その接触のなかで, 教師が示してゆくほかない。ところが, 今日, 教師は, 一人一人の子供と手間をかけて接触する時間がない。忙しすぎるのである。そして, 道徳教育の教科化は, さらに教師の過重労働に拍車をかける結果になるのではなかろうか」と指摘している(「(異論のススメ)道徳の教科化

教えがたい社会生活の基本」朝日新聞，2017年4月7日，朝刊）。

- 55) 「現実感覚としての道徳」と言い換えてもよい。八木誠一は「現実感覚とは、視覚や聴覚などの総和ではなく、実は自分自身の身体感覚なのだ。現実性のある感覚には、知性や感情や意思を含む身体全体が関与する。現実と現実的にかかわるのは身体だからだ」と指摘している（八木誠一（2005）『ふくろうのつぶやき—思想のショート・ショート—』久美，64～65ページ）。
- 56) 八木誠一（2005）『ふくろうのつぶやき—思想のショート・ショート—』久美，161～162ページ。
- 57) 八木誠一（2005）『ふくろうのつぶやき—思想のショート・ショート—』久美，165ページ。
- 58) たとえば、ギリシャ・ラテンの古典世界においては、これらの学問は必ずしも当時の職業生活に必要な知識ではなく、人間の知的可能性の円満な展開を示すものであるから、教育というより人間的教養の理想像を示すものとして考えることができる。

参考文献

- 赤嶺守（2004）『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』講談社
- 井上秀雄監修，JCC出版部著（2011）『絵で解る琉球王国—歴史と人物』JCC出版
- 上里賢一（2006）「程順則の父と子—程順則の情愛と苦悩—」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集（12）』琉球大学
- 大城立裕（1992）『琉球の英傑たち』プレジデント社
- 紙屋敦之，田名真之，豊見山和行，田里修，仲間勇栄，黒島為一，高良倉吉，糸数兼治，池宮正治，里井洋一，真栄平房昭（1990）『新 琉球史—近世編（下）—』琉球新報社
- グレゴリー・スミッツ著，渡辺美季訳（2011）『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史』ベリカ人社
- 桑江克英訳註（1971）『球陽』三一書房
- 佐藤亮（2016）『琉球王国を導いた宰相 蔡温の言葉』ボーダー新書013，ボーダーインク
- 角田多加雄（1984）「六諭衍義大意前史—六諭衍義の成立と，その伝来について—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学心理学教育学 第24号』慶應義塾大学大学院社会学研究科
- 高良倉吉，紙屋敦之，豊見山和行，真栄平房昭，上原兼善，梅木哲人，田名真之，池宮正治（1989）『新 琉球史—近世編（上）—』琉球新報社
- 筒井清忠編（1999）『日本の歴史社会学』岩波書店
- 名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11，名護市教育委員会文化課市史編さん係
- 那覇市企画部市史編集室（1976）『那覇市史 資料篇 第1巻5』那覇市役所
- 野上元，小林多寿子編著（2015）『歴史と向きあう社会学—資料・表象・経験—』ミネルヴァ書房
- 眞栄田義見（1982）『名護親方程順則評傳』沖縄印刷団地出版部
- 増田康弘（2017）「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（I）—南城市と那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第27巻第2号』流通経済大学社会学部論叢 第29巻第1号

- 増田康弘 (2017) 「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる (Ⅱ) —那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第28巻第1号』流通経済大学
- 増田康弘 (2018) 「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる (Ⅲ) —那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第28巻第2号』流通経済大学
- 八木誠一 (2005) 『ふくろうのつぶやき—思想のショート・ショート—』久美
- 安田和男 (2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク
- 米谷匡史 (2006) 『アジア／日本』シリーズ思考のフロンティア, 岩波書店

参考映像

- 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会, 株式会社シネマ沖縄 (2013) 「徐葆光が見た琉球—冊封と琉球—」株式会社シネマ沖縄